くいしんぼうのオオカミ

むかしむかし、あるところに、オオカミとキツネがすんどったんや。

ある日、オオカミがキツネのところに来て、いばったげに、

「何か食べるもんをくれんか。もし、くれないんなら、おまえを頭からわりわり（ばりばり）と食うてしまうぞ。」

いうて、おどしつけたんや。

「そうやいうて、何も食べるもんはなし、さあ、困ったこっちゃ。」

「ガオー、食ってやる。」

キツネは、びっくりぎょうてんして、

「オオカミにかかっちゃあ、なんぼにもかなわん。頭から食べられてしもうたら　たいへんや。」

「そうやゆうて、何も食べるもんはなし、困ったこっちゃ。」

いうて、考えよったら、ふと、夕べ、よそのうちのかま屋（台所）に、うまげなごっつおがあったんを思い出したんや。

ほんで、

「うちにはなんちゃ　食べるもんはないけんど、ようけごっつおのあるところを知っとるきに、そこへ案内します。」

いうて、先にたって、オオカミを　手びきしていったんじゃ。

ほんで、そのうちの裏の、かま屋のこんまい窓から、キツネが先に飛びこんで、オオカミのあとから、飛びこんだんじゃ。ほんだら、いろんなごっつおがようけ山のようじゃった。オオカミは大喜びで、すうぐにムシャムシャ、ムシャムシャ食べだしたんや。キツネも食べよう思うたら、オオカミがぎろっとにらんでから、

「おまえは、わしが食べてからじゃ。」

というんで、キツネは、オオカミの食べよるのを見ながら、待っとったんじゃ。オオカミは、ひとりで、ムシャムシャ、ムシャムシャ、ムシャムシャと食べよる最中に、かま屋の外で『コトリ』と物音がした。キツネとオオカミは、あわててかま屋の隅に飛び

こんだ。

しばらくして、オオカミがキツネにいうた。

「今のは、何の音だ。」

その声は、弱々しい声だったので、キツネが少し安心して、

「風の音ですよ。」

とやさしく返事したんじゃ。ほんだら、すうぐにオオカミは、またいばったげに食べだした。

キツネも食べようと思ったら、ぎろっとにらんで、

「おまえはわしが食べてからじゃ。」

というがはやいか、また、パクパクパクパク食べだしたんじゃ。ほしたら、今度は、かま屋の中で、『ゴトリ』と物音がした。オオカミは、また、大あわてでかま屋の隅に飛びこんだ。

しばらくして、オオカミがキツネにいうた。

「今のは、何の音だ。」

その声は、以前よりも、もそっと弱々しいこえだったんで、キツネは元気が出た。ほんで、

「ネズミの音ですよ。」

と、元気よく返事をしたんじゃ。そしたら、安心したのか、オオカミは、もそっと、いばったげにして食べだした。キツネも食べようと思ったら、ぎろりとにらんで、

「おまえは、わしが食ってからじゃ！」

と、大声でさけんでガシャガシャガシャガシャ食べよった。

ほんだら、何やかま屋の方で、『ごそごそごそごそ』と音がするきに、家の主人がおかしいと思うて見に来たんや。そうっと見たらオオカミがせっかくのごっつおをムシャムシャムシャムシャ食べよる。ほんで、家の主人は、そおっと、かま屋の出入り口全部に、『コトリ』『ゴトリ』と、しんばり棒をして、逃げられんようにした。

オオカミは、そんな音は、また風やネズミが悪さしよんだと思って、バリバリバリバリ腹いっぱい食べよった。それを見た家の主人が、かま屋の外で

「やあ、ぬすっとじゃ、ぬすっとじゃ、ぬすっとオオカミじゃぞ。」

いうて、大けな声で、おらびながら、かま屋の中へ飛びこんで来た。その後から、家のもんがようけ、棒や、刀や、やりや持って、どたどた追わえて来たんじゃ。

キツネは、

「こりゃ、たいへんじゃ。」

言うんで、ぱっと窓から飛び出して、逃げてしもうた。オオカミもびっくりして、逃げよう思うたけど、あわてとるもんやきに、入ったとこが分からんのじゃ。あっちやこっちや走り回って、ほんでも、やっと入った窓がわかったんで、やれ、よかった思うて、ぱっと飛び出したんや。

ほんだら、頭は外に出たけんど、腹がつかえて出られへん。あんまりようけ食べたもんじゃから、腹がふくれてしもうとったんじゃ。頭だけ外に出して、ばたばた、ばたばたしよったところを、みんなして、つかまえてしもうたそうな。

おしまい

（「ふるさとかんおんじ　むかしむかしのはなし」より）

参考文献　高室村史